訳者からのひとこと

レオナルド・パドゥーラ著
『わが人生の小説』
水声社、2022

著者のレオナルド・パドゥーラはトロツキー暗殺を扱った『犬を愛した男』で世界的に有名になったキューバの作家です。元々エンタメ要素のある推理作家としてデビューした――推理小説作品としては『アディオス、ヘミングウェイ』が翻訳されています――のですが、この作品では 21 世紀に入りつつあるキューバの文化や政治のコンフリクトを意識したかなり重いテーマに挑みました。もちろん当時のキューバで身の回りに起きていることをそのまま書くわけにはいかないので、趣向を凝らすわけですが、それがかなり大掛かり。物語は 1999 年と 19 世紀のキューバを往還しながら進みます。恋愛、陰謀、裏切り、亡命、詩、フリーメイソンとキューバ独立…… これほど大掛かりな仕掛けを用意しないと、たちまちキューバの現状を風刺している作品だとバレて、検閲の網に引っかかったのでしょう。その結果、小説を読むリテラシーのない人間にはこの小説がいかに危険なシロモノなのかがわからない、つまりわかる人にしかわからない難しい小説になってしまったことは否めません。そういう意味では読者を選んでしまうので、パドゥーラ作品の中では珍しく商業的にはさほど成功していません。

しかしパドゥーラの思いをあえて訳者の言葉で伝えるとすれば、彼は抑圧的な社会にいながらにして、その内側から声をあげようとして、しかもそれを芸術作品でやろうとしたのです。このことを少しもわかろうとせずに、読みはじめてみて難しいな、わかんないな、と言って作品を放り出してしまうと、それは危険です。場合によって、そういう態度は結局抑圧する側に取って思うツボ、抑圧に加担することと同じになってしまうでしょう。一見わかりにくい芸術を理解しようとその作品の前で踏みとどまることは、とても重要なことです。

そういうこともあって、自分への挑戦としてこの作品を翻訳しました。自分は果たして芸術に向き合っているのか、いつの間にか抑圧する側に加担していないか、抑圧するとはどういうことか…… この作品を読みながら、そのことばかりを考えていました。一つ言えるのは、抑圧する側は、自分たちの論理を「正しい」と考え、その「正しさ」を武器に、敵が死ぬまでその「正しさ」を押しつけてくることです。厄介なのは、敵が死んだ時にその「正しさ」は「正しいこと」だと証明されてしまうのです。つまり「間違っている」から死んだのだと言えてしまう。であるからこそ、表現は絶やしてはいけないのだと思います。表現が尽きた時、ほら、お前、間違っていたんだよ、と言われないためにも。この作品に備わるある種の凄みは表現することへの過剰な欲望です――死んでたまるか！――。というわけで、多少わかりにくかろうが、それは読み応えなのだと思って読んで欲しい。

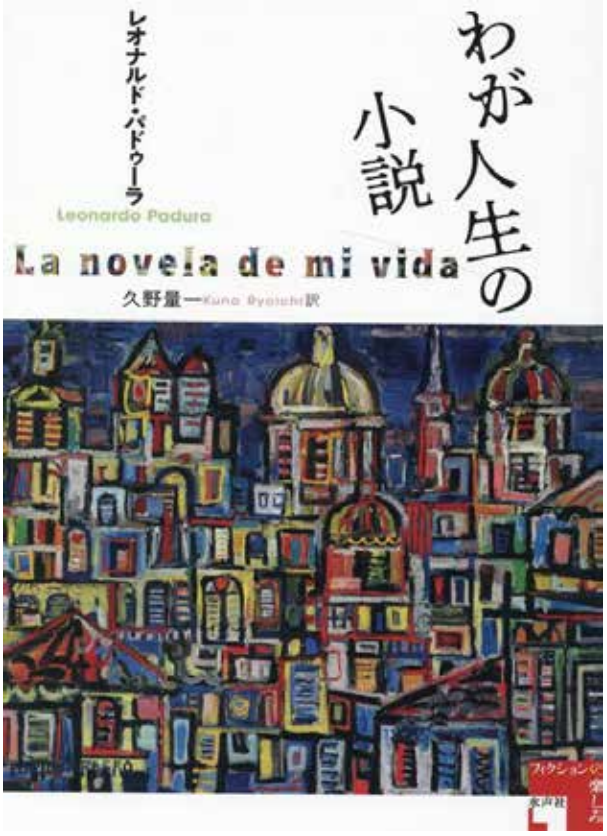
翻訳は難航して、このままじゃ終わらないのではないか、「わが人生の翻訳」になってしまいそうだと思う時もありましたが、同僚のクララ先生をはじめ、周囲の助力を得なが

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

らなんとか仕上げました。そう、それからこの作品のトルコ語への翻訳者と知り合うことができ、彼にはメールでわからないところを尋ねました。彼も同じことをやっていましたが、仏訳や英訳が出ていないので、ドイツ語訳を参照しました。

女性の語り口をどう訳すかは少々悩みました。主人公の男（物語上では 50 歳くらい）には、長年の片想いの相手である同世代の女性がいて、2 人で会話を交わすのですが、彼女のセリフをどんな日本語にしたらよいのかがわからない。要は二人称の使い方の難しさです。「あなた」がいいのか、そうではないのか……

この翻訳をしたのはちょうどコロナ時代の真っ盛りでしたが、驚いたことに、高校時代のクラスメイト（女性）から連絡がありました。30 年ぶりに電話で話したり、メッセージのやりとりをしました。互いの近況報告の時、つい僕はその時の彼女の口調に注意深くなりました。どんな語り口なのか、興味深かったのです。小説では 18 年ぶりの再会ですが、こちらは 30 年ぶりの音声や文字のみの再会です。翻訳でその時の会話の雰囲気をそのまま生かしたわけではないのですが、なんとなくイメージのもとになったかもしれません。翻訳というのはどれほど原書と睨めっこしても、つい訳者が生きているその時が映し出されてしまう。本というのは、読者がそれを読むときの時代やその読者の個人的で親密な拘束を受けながら読まれていくのだとつくづく思いました。

そして最後。この本はカバーが素晴らしいです。僕が好きなキューバの画家レネ・ポルトカレーロの『ハバナの風景』を表紙にあしらってくれました。編集者が表紙をどうしましょうかと言った時にふと名前を出したらすぐに動いてくれて実現したのです。実はこの画家の名前も小説内で言及されますので、ぜひその辺りまででも読んでください。

（久野量一）